様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０３１３

研究課題名（和文）近現代英米文学における環太平洋旅行表象の思想史的研究

研究課題名（英文）A Historical and Theoretical Study of Representations of Pan-Pacific Travels in Modern British and American Literature

研究代表者
新井　英永（Arai, Hidenaga）

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：００２１２５９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、主にD・H・ロレンスの文学における環太平洋旅行表象の分析を行った。その際、エドワード・サイードやドゥルーズ＝ガタリ等に代表されるポストコロニアル批評ないし旅に関する理論を活用しただけでなく、ジャック・ラカンとスラヴォイ・ジジェクによる構造主義的ないしポスト構造主義的精神分析批評を援用した。
　また、ロレンスと同時代のモダニストであるジェイムズ・ジョイスとの比較研究も行った。実際の分析は比較の前提となる両者の共通性に焦点を当てて行ったが、両作家の旅の方向性や捉え方の違いを把握し、ロレンス等の環太平洋旅行表象の特徴を際立たせる可能性も見出せた。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes mainly the representations of pan-Pacific travels in D. H. Lawrence’s literature. In this analysis, not only post-colonial theories or theories of travel by Edward W. Said or Gilles Deleuze and Félix Guattari but also structural or post-structural theories by Jacques Lacan and Slavoj Žižek are used.
 Furthermore, D. H. Lawrence and his modernist contemporary James Joyce are examined by the comparative method. While this examination is based on their similarities, to grasp also differences in their attitude towards travel makes it possible to bring into relief characteristics of Lawrence’s or other writers’ representations of circum-Pacific region.

研究分野：人文学

キーワード：D・H・ロレンス　環太平洋　旅行表象　逃走線　ジャック・ラカン　スラヴォイ・ジジェク　現実界　ジェイムズ・ジョイス

１．研究開始当初の背景

英国のモダニズム作家 D・H・ロレンスの研究と並行して一時期ロレンスと親しく交流していたキャサリン・マンスフィールドの研究を行っていたが、その過程で、マンスフィールドの短編小説にちりばめられている中国人やニュージーランドの先住民・マオリ族の旅行・異文化表象の意味と機能を解明する必要があると思われた。なお、マンスフィールド研究の成果の一部は前年度に論文「Katherine Mansfield “The Garden Party” の浮遊性再考 ――開かれた庭をめぐる対立構造について」(『言語文化学研究　英米言語文化編』第 6 号、大阪府立大学、2011 年）としてまとめた。

また、ロレンスやマンスフィールドと同じ時期に活躍したもう一人のモダニズム作家ジェイムズ・ジョイスの短編小説も読み進めていたが、旅行表象の観点からジョイスとロレンスを比較検討すると、両作家の新たな対照性のみならず、共通性をも提示できるのではないかと考えた。

こうした視座をアメリカの作家あるいはアメリカ大陸に広げ、環太平洋というより広い視野から近現代英米文学における旅行表象を研究しようと考えるに至った。

２．研究の目的

本研究は、近現代英米文学、その中でも旅行記や紀行文学において、環太平洋諸国あるいはそこに住む人々が、欧米植民地主義・帝国主義等を背景にどのように表象されてきたのかを、文学・思想史的に解明することを目的とした。換言すれば、英米国内における諸言説・諸旅行表象という観点から、これまでの英国や米国を中心とした先行研究を統合しつつ、作家間・作品間・読者間・地域間の差異の精査に基づき、環太平洋旅行表象の系譜を、多面的に浮かび上がらせることを目指した。

３．研究の方法

旅行記や社会・科学的言説と文学テクストとの関係を探るときの理論的枠組みとしては、ミシェル・フーコーの研究を、環太平洋を中心とした旅行表象分析の枠組みとしては、エドワード・サイードの研究を踏まえた。

また、植民地主義や帝国主義を視野に入れつつ、D・H・ロレンスを含む英米作家による様々な「旅」のあり方を分析・評価するドゥルーズ＝ガタリの著作も参照した。実際サイードが、『文化と帝国主義』において主要なフランスの理論家たちの中で例外的に帝国主義の問題に無頓着でなかった思想家としてジル・ドゥルーズを挙げていること、また、フェリックス・ガタリとの共著でネグリ／ハートの『帝国』に大きな影響を与えた『千のプラトー』における「遊牧論」や「戦争機械」といった概念に、留保つきながら思想の使命としての解放性を認めていることは注目に値する。

加えて、包括的入門書 *The Cambridge Companion to Travel Writing*, ed. Peter Hulme and Tim Youngs (2002) 以降の「トラベル・ライティング」研究の進展も視野に入れた。

さらに、ジャック・ラカンとスラヴォイ・ジジェクによる構造主義的ないしポスト構造主義的精神分析批評も援用した。

４．研究成果

まず、上述の思想家のうちドゥルーズ＝ガタリに着目し、その旅の理論とともに本研究に重要な意味を持ちうる哲学論であると同時に芸術論でもある彼らの『哲学とは何か』を取り上げ、D・H・ロレンスのエッセイ “The Novel and the Feelings” との比較検討を行った。具体的には、『哲学とは何か』における変様態(アフェクト)等の概念を検討し、ロレンスの感情観ないし情動観と比較し、小説の情動論的読解の今後の可能性を探った。たとえば、ロレンスを太平洋への旅とその表象に駆り立てた情動を理解することは、彼の長編小説『カンガルー』のみならず、他の環太平洋諸国あるいはそこに住む人々を表象したテクストを理解するうえで有意義であると判断したためである。

次に、D・H・ロレンスの後期小説、とりわけ環太平洋地域を舞台とした小説を論じた単著『D・H・ロレンスと批評理論――後期小説の再評価』（国書刊行会、2008 年）の英語版刊行が、出版社 Rodopi（アムステルダム、ニューヨーク）により認められたため、加筆修正を行なった。その後、この英語版は、出版社編集者との共同による編集作業を経て、2014 年（平成 26 年）9 月に上梓された。英語版タイトルは、*Literature along the Lines of Flight: D. H. Lawrence's Later Novels and Critical Theory* である。日本語版主題は副題（*D. H. Lawrence's Later Novels and Critical Theory*）とし、日本語版にはなかった *Literature along the Lines of Flight* を新たな主題とした。この新タイトルはドゥルーズ＝ガタリの概念である「逃走線」含んでおり、ロレンス文学における旅あるいは旅行表象に焦点を当てた著作であることを明示した。

加筆修正を行なったことに加え、セクションタイトルを設けたことが日本語版と異なる。内容紹介にもなるので、以下章題とともに提示する。

○序論
○第一章（超越論的媒体―『恋する女たち』における形而上的欲望）マリかリーヴィスか; 欲望の問題系; グドルーンの形而上的欲望（媒体と客体の混同）；ジェラルドの形而上的欲望（主体と媒体の混同）；バーキンのドゥルーズ的かつジラール的媒体の企図; バーキンとアーシュラのヴィジョンの乖離; ロレンスとジラール
○第二章（抵抗の目に見えない核―『アーロンの杖』における反美学的・反有機的傾向）さまざまな裂け目を内包する小説; 作者と小説の挑発的無関心; アーロンの自由の基盤としての敵対する核; アーロンの不安定な自我と夢; リリーの摂理的現実; リリーの言葉によるダブル・バインド; 反美学的・反有機的基盤としてのアーロンの言葉
○第三章（脱領土化と再領土化―『アーロンの杖』とドゥルーズ＝ガタリ『千のプラトー』）ドゥルーズ＝ガタリにとってのロレンス; アーロンの逃走のプリテクスト（形式的口実）としての「出エジプト記」；アーロンと脱領土化; リリーと再領土化; 有機的なものに抗する逃走線
○第四章（復讐心と脊椎意識の断念―『カンガルー』と群衆理論）『カンガルー』再評価の動き; ウィルフレッド・トロッターの『平和と戦争における群れの諸本能』と優生学的言説; トロッターの第一次大戦観; ロレンスの第一次大戦観; 『カンガルー』における群衆理論; 『カンガルー』における暴徒とリーダーシップの表象; フロイト的良心との類似
○第五章（群衆の消滅と悪の遍在化―『カンガルー』から『セント・モア』へ）無批判な自然の把握を超えて; 幻想としてのセント・モア; 『セント・モア』におけるグローバル化した悪; アジア、ドイツ、『セント・モア』；『セント・モア』とアメリカ
○第六章（不在の破壊的創造―『セント・モア』における自然・文明概念）赤色人の欠落とルウの逃走線; 『セント・モア』と社会ダーウィン主義・優生学の言説; 浮遊するシニフィアンとしての「自然の創造」; 創造の高い発展段階と周縁化された悪
○第七章（消え行く媒体としての「アジアの中心」―『セント・モア』とネイティヴィスト・モダニズム）ルウの「現実界」との遭遇; ルウの三つの型の対象; セント・モア、「アジアの中心」、「野生のアメリカ」; 犠牲と大文字の「他者」；土着主義、原始主義、普遍主義; ロレンスと帝国主義をめぐるマイケルズとサイード
○第八章（セクシュアリティ、ナチズム、ポストコロニアリズム―『羽毛の蛇』とミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ―知への意志』）ケイトとセクシュアリティ; ケイトの抵抗する弾力的な自我; 「歴史的な『反転＝退行の形』」の主体としてのケイト; 小説の決定不能性の含意; 『羽毛の蛇』とドゥルーズ
○結論（ロレンスとキャノン）『チャタレー夫人の恋人』とロレンス小説のキャノン; ロレンスと批評理論

本書は、The Johns Hopkins University Press から刊行されている季刊誌 *Modernism/modernity* 21.4(2014)、22.1(2015) の "Recent Books of Interest" で取り上げられたほか、北米の学術雑誌 *D.H. Lawrence Review* やイタリアの学術雑誌においても書評が掲載される予定である。

最後に、ジャック・ラカンとスラヴォイ・ジジェクによる「現実界」をはじめとする諸概念を援用しつつ、ロレンスと同時代のモダニストであるジェイムズ・ジョイスの短編 "The Dead" における西方への旅の表象の分析を行った。直接の比較参照軸は、ロレンスの同時期の短編 "The Shadow in the Rose Garden" とした。実際の分析は比較の前提となる両者の共通性に注目して行ったが、両作家の旅の方向性や捉え方の違いを把握し、ロレンス等の環太平洋旅行表象の特徴を際立たせるという目的を持った試みである。ロレンスは『セント・モア』という作品でジョイス同様西方への旅を表象しており、二人のモダニストの太平洋に対するスタンスの違いを把握する意味でも有益であった。

タイトルを "An Encounter with the Real: A Lacanian Motif in Joyce's 'The Dead' and Lawrence's 'The Shadow in the Rose Garden'" としてまとめたこの論考は、一定の説得力ある議論を展開できたためか、Heather Lusty と Matthew J. Kochis を編者とするジョイスとロレンスの比較論文集への収録が認められ、かつフロリダ大学出版局による査読も通過した。ただし、書き直しを求められたため再提出し、最終的に *Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence* 所収論文として、2015 年 3 月に出版された。裏表紙に Fiona Becket 等著名な研究者の推薦文が載る本書も、多くの場所で書評され、ロレンス・ジョイスをめぐる議論の活性化に貢献することが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
<u>新井英永</u>、「小説の情動論的読解に向けて――D・H・ロレンス「小説と感情」とドゥルーズ＝ガタリ『哲学とは何か』」、『言語文化学研究　英米言語文化編』（大阪府立大学）、査読無、第７号、2012、23-37。

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）

①Hidenaga Arai, Rodopi, *Literature along the Lines of Flight: D. H. Lawrence's Later Novels and Critical Theory*, 2014, 162.

②Hidenaga Arai, University Press of Florida, *Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence*, 2015, 161-74.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
新井英永（ARAI HIDENAGA）
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：00212598

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：